

# 家庭訪問実習の満足度の要因分析 — 学生と訪問対象者のアンケート調査より —

長崎 雅子・吉川 洋子  
曾田 陽子・若林 由香

## Analysis of Factors Determining Satisfaction Quotient in Home-Visiting Practicum — Based on Data Obtained from Students and Hosts —

Masako NAGASAKI, Yoko YOSHIKAWA,  
Yoko SOTA and Yuka WAKABAYASHI

### 概 要

看護基礎教育の初期に行う基礎看護実習Ⅰ（1年次後期）に、大学周辺の家庭を実習場とする家庭訪問実習を実施してきた。実習終了後に実施した調査では、学生・訪問対象者の双方が実習体験について満足と回答していた。学生・訪問対象者が実習のどこに意義を見だし、満足と回答したかを明らかにするために、満足度に影響したとみられる要因を分析した。その結果、家庭訪問実習は学生の実習目標の達成に加えて、学生と地域の人々の相互理解、交流の場となっていた。また、訪問を受けた人々にとっては、看護・看護教育への関心を積極的に引き寄せる機会となっていたことが示唆された。

キーワード：基礎看護実習，家庭訪問実習，要因分析，満足度

### I. はじめに

看護基礎教育の初期に行う基礎看護実習Ⅰ（1年次後期10月～2月）は、大学周辺の家庭を訪問する実習（以下家庭訪問実習と称す）である。この実習は地域の健康な成人・老人を対象として、学生が2人一組で月に1回、合計3回継続的に訪問して、訪問対象者との話を通して、看護の対象者を生活している人として捉え、総合的に理解するための基礎的能力を養うことを目的としている。実習終了後に実施したアンケー

ト調査では、学生・訪問対象者の双方が実習体験について満足と回答していた。そこで、学生・訪問対象者は家庭訪問実習のどこに意義を見出し、満足と答えたかを明らかにするために、学生・訪問対象者の満足度に影響を及ぼした要因を分析する。

### II. 家庭訪問実習の概要

#### 1. 基礎看護実習Ⅰに位置づけた意図

家庭訪問実習を基礎看護実習Ⅰに位置づけた理由は、①学生は同世代以外との交流が極めて

少く、年代の違う人とのコミュニケーション体験が不足している、②臨床実習では身体面に注意がむき生活面に視点が向きにくい<sup>1)</sup>、③看護基礎教育の早期に、看護の対象者との関係を通して自己の課題を見つけ、自己活用の仕方を考えるの3点である。これらの理由から、初めての实習の場を生活が理解しやすい家庭とした。対象を健康者にした理由は、病気を持った人は生活空間が限られているのに対し、健康者は生活空間が広く、さまざまな側面から生活が理解できると考えた。また、受け入れる側にとっては、援助技術を持たないこの時期の学生の受け入れは、健康者でないと困難であると予想した。

## 2. 目標

### 1) 看護の対象者を生活者として理解する

- ①個人の日常生活を理解する
- ②個人の役割（家庭内・社会において）を理解する
- ③個人の生活史を通して特性（性格、価値観）を理解する
- ④個人の健康状態について理解する
- ⑤個人を支える家族について理解する
- ⑥個人・家族を支える地域社会を理解する（親族、友人、知人、保健・医療・福祉サービス等）
- ⑦個人の居住する環境を理解する
- ⑧情報の関連性を考えて個人の全体像を書く

### 2) 個人や家族の状況をふまえて円滑なコミュニケーションがとれるように工夫する

### 3) 実習を通して自己の学習課題を見出す

実習方法は、訪問は学生だけで行い、教員は訪問前後に学生が提出する記録と、学生、教員によるカンファレンスや、訪問対象者を交えた報告会を通して指導を行うこととした。

## III. 研究対象

1995～1997年度の基礎看護実習Ⅰの終了後、島根県立看護短期大学1年次生に実施した家庭訪問実習に対する調査票（5段階の満足度、難易度とその理由で構成）、239人分（回収率95.6

%）と、訪問対象者に実施した、訪問を受け入れての3段階の満足度の評価と意見・要望、99人分（回収率79.8%）

## IV. 研究方法

学生の満足度と難易度の理由、および訪問対象者の意見・要望を、研究者2人がコード化し、類似したコードを集約し、カテゴリー化した。

## V. 結果

### 1. 学生・訪問対象者の実習に対する満足度

実習に対して満足（満足度5, 4）と答えた学生は209名で87.4%, どちらともいえない（満足度3）は21名で8.8%, 不満足（満足度2）は9名で3.8%, 平均値は4.29±0.78であった（表1）。一方、難易度については、難しい（難易度2, 1）と答えた学生は165名で69%, どちらともいえない（難易度3）が54名で22.6%, 易しい（難易度5, 4）は20名で8.3%, 平均値は2.22±0.86であった（表2）。訪問対象者の満足度は良いが88名で88.9%, どちらともいえないが11名で11.1%, 悪いはなかった（表3）。また訪問対象者の次年度への訪問継続率は1995年度が85.3%, 1996年度が90.5%, 1997年度が83.3%, 3年間継続して引き受けている人は76%といずれも高率だった。

表1 学生の実習に対する満足感（n=239）

	5 (満足)	4	3 (どちらとも)	2	1 (不満足)	平均	標準偏差
1995年度	26	37	9	6	0	4.06	0.87
1996年度	36	38	4	2	0	4.35	0.7
1997年度	46	26	8	1	0	4.44	0.72
合計	108	101	21	9	0	4.29	0.78

表2 学生の実習に対する難易度（n=239）

	5 (易しい)	4	3 (どちらとも)	2	1 (難しい)	平均	標準偏差
1995年度	0	5	17	38	18	2.12	0.84
1996年度	1	4	16	46	13	2.17	0.81
1997年度	1	9	21	38	12	2.37	0.91
合計	2	18	54	122	43	2.22	0.86

表3 訪問先の満足感 (n=99)

	良い	悪い	どちらとも言えない
1995年度	25 (86.2%)	0	4 (13.8%)
1996年度	32 (86.5%)	0	5 (13.6%)
1997年度	31 (93.9%)	0	2 (6.1%)
合計	88 (88.9%)	0	11 (11.1%)

## 2. 学生・訪問対象者の満足度に影響を与えた要因

### 1) 学生の満足度に影響した要因

学生の満足度の理由から類似性に基づいて『対人関係技能』『体験学習』『交流』『対象の理解』の4項目を分類した(表4)。記述内容のほとんどが満足した理由であったが、満足度が低かった(5段階評価2)学生の回答理由は、一緒に訪問したペアの学生に依存したために、コミュニケーション成立を認識することができなかったことであった。満足の理由の記述例は、「全く面識のない訪問対象者と話ができてうれしい」「改めてコミュニケーションの重要性を認識した」「1回目の訪問では気まずかった関係が、徐々に改善していることを実感した」「訪問対象者と面と向かい合って、自分の努力すべきことがよく見えた」「コミュニケーションをとるに当たり、たくさんの事を考えたので学びが多かった」など実習過程では困難なことがあったが、結果として満足したという内容であった。

### 2) 学生の難易度に影響した要因

表4 学生の満足度の理由

カテゴリー	対人関係機能	体験学習	交流	対象の理解
記載件数	40	33	20	18
記載内容	コミュニケーション成立の認識	自己の理解	地域の人との交流	情報収集
	コミュニケーションの難しさ	自分の課題の発見	年代の違う人との交流	全体像の理解
	コミュニケーションの大切さを実感	視野の広がり・テーマの発見	家族との交流	全体像を描く手段
	コミュニケーション技術の理解	他者の生き方からの学び		
	相手の人との関わり合いの重要性	実感をもった理解		
	関係のプロセスを理解	体験から得る学びの多さ		
	年代の違う人とのコミュニケーションの経験・理解			

難易度の理由からは、『対人関係技能』『対象の理解』『実習の不安』『実習の方法』『楽しみ』の5項目を分類した(表5)。ほとんどが難しかった理由であったが、訪問対象者が積極的に話をしてくれたためもっぱら聞き役であったり、家族が同席していてサポートしてくれたために困る場面がなかった学生は易しかったと回答していた。『対人関係技能』が難しかった例として、「初対面の人に対してどのようにふるまえばよいか迷った」「関係の手がかりがつかみにくかった」「質問はできたが関係ができたかどうかはわからない」などと述べていた。また、会話については、「事前に考えた質問や会話の展開が実際にはできなかった」「共通の話題を見つけにくい」「タイミングよく話題を提供することが難しい」「自分の考えていることや思いが適切に表現できない」「沈黙時の対処の仕方」など会話の技能に関する内容が多かった。

『対人関係技能』『対象の理解』については、満足度、難易度の理由の両方に同一のことがあがっていた。

表5 学生の難易度の理由

カテゴリー	対人関係	対象の理解	実習の不安	実習方法	楽しみ
記載件数	38	15	8	7	3
記載内容	コミュニケーションの方法	観察	不安	考えることが多い	難しいが楽しい
	関係の成立・発展	情報収集	緊張	記録物が多い	
	年代の違う人とのコミュニケーション	アセスメント	初めての体験	事前学習が重要	
	方言	全体像の理解			
	共通の話題				
	話題提供				
	意見の表出困難				
	沈黙の対処法				
	気遣い				
	言葉遣い				
	傾聴				

### 3) 訪問対象者の満足度に影響した要因

訪問対象者の意見・要望からは、『交流』『カリキュラム・実習方法』『自己実現』『看護への関心・期待』『学生の態度・技術』『相互理解』の6項目を分類した(表6)。訪問対象者からの意見は、「若い人と話ができて楽しい時間が過ぎた」「最初はなにを話すのかとまどったが、学

生の親思いのやさしい人柄にふれ、こんな人に看護してもらえたら幸せだと感じた」「老人のことをわかって欲しくて話した」など学生と訪問対象者相互のふれ合いや相互理解に関する記述があった。また、「学生の勉強に協力できたか不安だった」「手術の時に看護婦に世話になったので今度は自分が役に立ちたい」など教育に協力するという積極的な姿勢が見られた。また、「カリキュラム・実習方法」「看護への関心・期待」「学生の態度・技術」の記述内容は、「学生は会話技術をもっと学ぶ必要がある」「地域医療・地域看護のなかで家庭訪問実習を位置づけをしてはどうか」「方言がわからない学生がいるのでペアの組み方を考える」など地域の人の看護教育に対する興味・関心が伺えた。

表6 訪問対象者の実習への意見・要望

カテゴリー	交流	カリキュラム・実習方法	自己実現	看護への関心・期待	学生の態度・技術	相互理解
記載件数	33	19	16	15	14	11
記載内容	楽しみ・心地よい	訪問時間	役立ちたい	看護婦への感謝	礼儀作法	看護学生への関心
	親しみ・親切	社会勉強	自分の勉強	看護職者の態度	実習目的の自覚	話せばわかる温もり
	話し相手	学生の組み合わせ		将来を支える人材	相手を尊重	高齢者の心の理解
	エネルギーをもらう	生きた学習			会話技術	高齢者の生活実態
	孫のような存在	実習目的			学生の熱意	短大への関心・親近感

## VI. 考 察

学生の満足度に影響した要因『対人関係技能』『体験学習』『対象の理解』は、実習目標1) 看護の対象者を生活者として理解する、2) 個人や家族の状況をふまえて円滑なコミュニケーションがとれるように工夫する、3) 実習を通して自己の学習課題を見出すの達成に関係していたと考えられる。学生は初めての实習で対象者を生活者として理解するために、さまざまな工夫をしてコミュニケーションをとっていたことが難易度の理由から推測できる。学生の満足度と難易度の両方にあがっていた『対人関係技能』について見てみると、コミュニケーションについて、満足度の理由の記述には、成立の認識、困難

性、重要性、技術の理解など抽象的概念について述べられていたが、難易度の記載内容はより具体的であり、学生と対象者との関係、話題、表現方法、態度などについて行動レベルの技能に関する内容が多かった。学生は訪問対象者と人間関係を作り発展させるために、コミュニケーションをとりながら、さまざまな試みをして対人関係技能を磨くための工夫をしていた。

『対象理解』について学生が抱えていた困難を難易度の理由から考えてみる。まずコミュニケーションを手段として情報収集する段階では、訪問対象者は自立して生活している人であり、健康上の問題を抱えていたとしても、問題として見えにくい状況があった。また、学生は初めての实習であり、訪問対象者との人間関係作りに一生懸命で、観察する余裕がないことや、観察力そのものがまだ不十分であり、観察したことの何が対象理解のための情報となるのかわかりにくかったと考えられる。そして集めた情報を関連づけてアセスメントするには知識が必要であるが、カリキュラムの進捗の関係もあり、知識を活用してアセスメントし、全体像を描くまでの思考過程そのものが難しかったと考えられる。この点については、教員は学生の状況をふまえた指導のあり方を検討しなければならない。しかし、学生は早い時期に学習したことを体験する機会を得たことで、様々な経験を通して実習目標達成にむけた努力を行っていた。このような努力の過程での主体的な取り組みが、『体験学習』として自己の課題の発見や学びにつながったと考えられる。実習の過程では難しかったが、結果としては目標の達成につながり満足度に影響を及ぼしたと考えられる。

学生の満足度と訪問対象者の意見の双方から、満足度に影響した要因として『交流』『対象理解』あるいは『相互理解』があがっていたことから、この実習は学生と地域の人の交流、相互理解の場となっていたと考えられる。訪問対象者は高齢者(平均年齢71.6歳)が多いことから、学生を孫のような存在として好感を持って迎えていた。高齢者のこのような暖かい対応は、

学生の実習に対する緊張・不安を緩和し、満足に導いたと考えられる。また、高齢者が実習に協力することは、自分が体験した、あるいは今体験していることを学生と共有することであり、自分の生活史が学生に役立っているという認識が自己実現につながり、満足度に影響したと考えられる。そしてさらに、学生と地域の人との接触は、地域の人々の看護教育に対する興味・関心を積極的に引き寄せる機会となっていた。訪問対象者から寄せられた看護職への感謝の気持ち、学生の態度、カリキュラムについての意見は、社会の看護や看護教育に対する見方や期待の一端を表しており、実習を通して社会のニーズを把握することが可能となった。

また、このような家庭を場とした実習では、その地域独特の文化に直接接触するため、県外出身の学生は方言に困ったり、挨拶について、地域の習慣をふまえるように求められたこともあり、地域の特性について事前指導の必要性が示唆された。

課題としては、家庭訪問実習で看護の対象者を生活者として捉え、総合的に理解しようとした経験が、3年次の実習において発展しているかを追跡し、基礎看護実習に位置づけたことを評価する必要がある。また、学生が難しいと答えている対人関係技能、対象理解については、授業の積極的な工夫や、教員の実習に対する関わり方の工夫が必要である。

## Ⅶ. ま と め

1. 学生の満足度に影響を与えた要因には、『対人関係技能』『対象の理解』『体験学習』があ

り、これらは実習目標の達成と関わっていた。

2. 学生・訪問対象者双方の満足度に影響を与えた要因『交流』と、学生の要因『対象の理解』、訪問対象者からの要因『相互理解』から、家庭訪問実習は、学生と訪問対象者が交流をはかり、相互理解を深める機会となっていたことが明らかとなった。そして訪問対象者の中には、教育に協力することが『自己実現』につながっている人もいた。
3. 訪問対象者の満足度に影響した要因『カリキュラム・教育方法』『看護への関心・期待』『学生の態度・技術』からは、家庭訪問実習が訪問対象者の看護・看護教育への関心を積極的に引き寄せる機会となっていることが示唆された。

## 引用・参考文献

- 1) 吉川洋子, 長崎雅子, 曾田陽子他: 基礎看護実習における生活者としての対象理解—「全体像」の分析をとおして—, 第29回日本看護学会論文集 看護教育, 100-102, 1998.
- 2) Yoko SOTA, Masako NAGASAKI, Yoko YOSHIKAWA, et al: Successful Nursing based on the Cooperative Relationship between the college and nearby community, Abstract of Third International Nursing Reserch Conference, 63, 1998.
- 3) 村本淳子: 基礎看護学におけるテュートリアル教育—テュートリアル教育をカリキュラムに取り入れて—, Quality Nursing, Vol.13, No6, 9-14, 1997.

**Analysis of Factors Determining Satisfaction Quotient  
in Home-Visiting Practicum**

**—Based on Data Obtained from Students and Hosts—**

Masako NAGASAKI, Yoko YOSHIKAWA, Yoko SOTA and Yuka WAKABAYASHI

A home-visiting practicum was carried out among local families in the course of the Basic Nursing Practicum I Course (second semester first-year students course) which initiates basic nursing education. Both students and hosts expressed their satisfaction regarding their practicum in a questionnaire survey upon completion of the course. To ascertain which aspects of the practicum seemed meaningful to students and hosts, we analyzed those factors thought to be relevant to the participants' satisfaction quotient. Results showed that, in addition to achieving the objective of the course, the Home-Visiting Practicum had also provided a basis for mutual understanding and social interaction between students and local residents. They moreover suggested the practicum had offered an opportunity to actively draw the interest of local residents to nursing and nursing education.

**Key words:** Basic Nursing Practicum, Home-Visiting Practicum, Analysis of Factors, Satisfaction Quotient